

未来につなげたい、大切な記憶

unforgettable memories leading us forward

岡山県瀬戸内市ふるさと納税事業 -後世に伝えたいハンセン病の歴史-

令和元年度中には、全国107名の皆様からユネスコ世界の記憶登録に向けたふるさと納税3,365,338円をお寄せいただき、誠にありがとうございます。本年度、愛生園及び光明園の自治会のご意向を伺い、以下の事業を実施しておりますので途中経過を報告いたします。

【長島愛生園】歴史的記録物（文書資料）脱酸性化処理 及びその他の保存処理

脱酸性化処理とは、近代酸性紙で作成された文書資料の劣化速度を遅らせる保存科学的処理です。放置したら数十年で朽ちる文書資料の寿命を数百年まで伸ばすことができます。

文書の古さや希少性に加えて、処理後に展示・公開できることを基準として以下251点を選び、多くの処理実績を持つキハラ株式会社様の専門工場に配送しました。新年1月ごろに処理が完了し、資料が返戻される予定です。



史資料名（作成時期：西暦）	処理数
事務本館文書群（1931～1962）	42
機関誌「愛生」（1931～1944）	17
盲人会「点字愛生」（1962～1982）	7
盲人会「点字愛生」（墨字版）（1958～1964）	12
長島愛生園年報（1931～1958）	8
長島愛生園創立記念誌（20・30・40周年）	3
長島紀要No.1～No.15（1954～1967）	4
厚生省監修 らい文献目録（社会編・医学編）（1957）	2
長島気象・風・雨・海陸風（1938～1962）	1
長島気象二十年報 長島愛生園気象観測所報告書（1959）	1
新聞切り抜き綴（1934～1952）	7
「らしんばん」（1953～1976）	120
らい詩人集団「らい」（1964～1980）	25
明石海人「白描」、「海人遺稿」（1939）	2

【邑久光明園】入所者証言映像24本への英語字幕挿入

事務局にて文字おこしを行い、ネイティブ翻訳家による翻訳を経て映像への字幕挿入作業を実施しております。来年2月ごろに社会交流会館モニターへの実装が完了する予定です。

ご寄付いただいた皆様（R3.3.18～R3.11.13）

多くの皆様からご寄付いただきました。誠にありがとうございます。

RSK山陽放送株式会社 様		100千円
本幡照夫 様		9千円
藤澤祥子 様		10千円
藤岳尋幸 様		10千円
釜井大資 様		104千円
匿名 様	金額非公開	6件
	合計11件	463,734円



愛生園
光が丘にて

ユネスコ世界の記憶が再開

プログラムの見直しが行われていた「世界の記憶」は、関係国による新規登録申請案件への異議申し立て制度などを新たに設け、本年7月にユネスコにて再開が宣言されました。日本国内の担当省庁である文部科学省は本年8月に国内候補の申請締め切りを10月15日と定め、新規案件を募集しました。

私どもはロードマップ委員会で協議をした結果、今回は登録申請を見送り、次回2024-2025国際登録サイクルを目指すこととしました。

なお11月10日付けで、今回の2022-2023サイクルに日本からは「浄土宗大本山増上寺三大蔵」(申請者：浄土宗、大本山増上寺)、「智証大師円珍関係文書典籍—日本・中国のパスポート—」(申請者：園城寺、東京国立博物館)の2件が推薦されることが決定されました。

長島愛生園歴史館では、以下を内容とする「長島愛生園関連記録遺産群」（仮）を申請対象とし、具体的な申請書の作成を行っています。

- 記録遺産群の構成
 - ①施設と入所者の記録（機関誌「愛生」）
 - ②施設の記録（事務本館文書、年報・記念誌、写真、動画など）
 - ③入所者の記録（自治会資料、文芸・宗教団体その他団体の記録、写真、証言映像など）
 - ④医学資料（長島紀要、らい文献目録一次資料、レプラなど）
- 記録遺産群の開始日と終了日
（最短）愛生園開設（1930年）から、らい予防法廃止（1996年）
（最長）愛生園開設に向けた記録（1920年代）から、国賠訴訟勝訴判決（2001年）
- 群を構成する記録遺産の収蔵先
①歴史館（仮）収蔵庫 ②神谷書庫 ③愛生誌編集部収蔵庫

ふるさと納税でご支援ください

本法人の活動費は、岡山県瀬戸内市に寄せられたふるさと納税でお支払いいただいております。瀬戸内市内の事業者様によるお礼の品も充実。引き続きご支援くださいますようお願いいたします。

【岡山県瀬戸内市ふるさと納税特設サイト】

<https://setouchi-cf.jp/nagashima/>



編集後記

■長島愛生園保存活用ビジョン案作成のため、昭和6年から33年まで発行された「年報」、10年毎発行の「記念誌」、開園から現在も発行されている機関誌「愛生」のデータをお借りし、施設の変遷を検討する上で必要な情報をまとめています。

■機関誌「愛生」には、園の「記念誌」と並行して「記念号」が作成されています。「年報」や「記念誌」では触れられていない内容が「愛生」には記載されており、とりわけ「年報」発行終了後は「愛生」に依らざるを得ない情報もあります。

■「愛生」では文芸や生活記録に加えて、園内の建物や場所、植物の記録も丁寧かつ長期にわたり記載されており、編集部担当の当時の入所者の通奏低音的情熱を感じます。「何でも続けることよ」と。

特定非営利活動法人
ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会事務局

〒701-4501岡山県瀬戸内市邑久町虫明6253番地
（国立療養所邑久光明園旧入所者自治会館内）
TEL：0869-24-8872 FAX：0869-24-8873
email: hansen-wh.jp@aiores.ocn.ne.jp

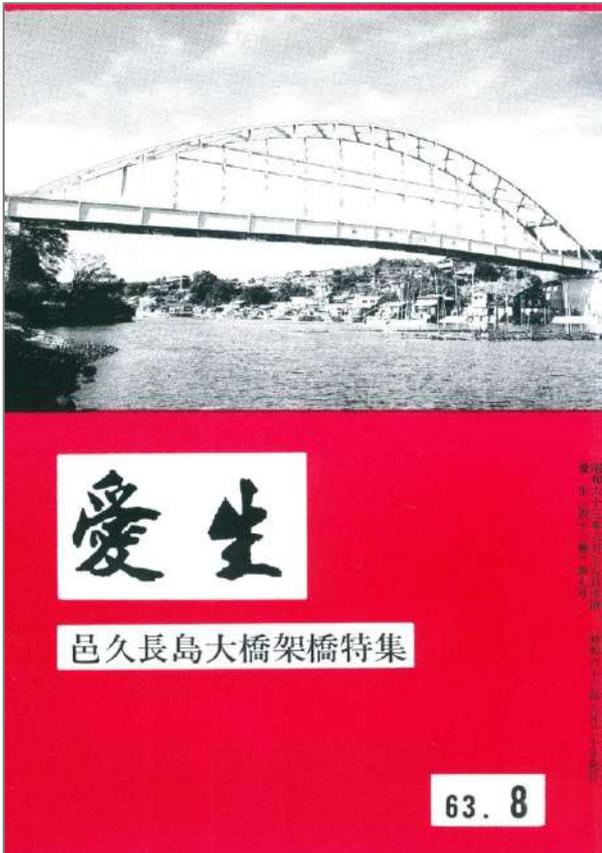
開所日：火曜日～土曜日
閉所日：日・月曜日、祝日、振替休日、年末年始
開所時間：午前9時～午後5時



ここは「島」であった

愛生「邑久長島大橋架橋特集」（第42巻第7号通巻551号昭和63年8月号）から承諾を得て転載

愛生編集部（長島愛生園入所者）



昭和六年、この地へ、多磨全生病院から八十一名の最初の患者が入居した。いわゆる開拓患者であった。

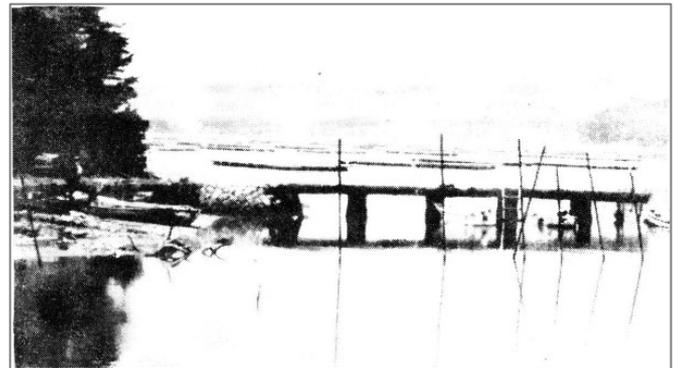
この園の礎石になるよう話を受けた、それぞれの仕事場で、ちからある者達であった。「島に楽土を」。

家を追われ、故郷にいたたまれず、巷にさまよう者達にとっても、人目をはばかり、納屋に隠れ住んだ者達にとっても、陽光を浴びて人と語り合える、ここは楽土であった。

が、祖国浄化の名のもとに、膨淋として起った無癩県運動で、つぎつぎに送り込まれて来た者達にとっては、肉親との、むごい別れを強いられた島であった。

患者居住区の西のはずれにある患者専用栈橋の名は回春栈橋、それは別れの栈橋であり、嘆きの栈橋でもあった。面会人も職員も、出入りはこの栈橋のある岬の裏側の職員栈橋からで、患者の立入りはゆるされなかった。父の名を呼び、母を恋い、佇ちつくす子の影。張って痛む乳房をおさえて、子の名を呼びつづける若い母の影、所詮それは嘆きの回春栈橋の汀まで。海に透明な壁があった。

戦いの日には、松根を掘り、同病相愛の名の下で重症棟の附添い、開墾、塩炊きで、麻痺した指はつぎつぎに欠落して行った。



飢えて、衰えて、年間三百四十余の櫃を送り出した。

ここは「島」であった。

昭和二十年代、ようやく戻った平安の中で、逃走防止の園内通貨は廃止されて、日本国通貨に切り替り、プロミンでの治癒第一号が出た。「島」の住人にも選挙権が与えられ、投票間近になると海土から候補者の名を連呼する船が、ひまなく回遊した。

（次頁に続く）

（前頁からの続き）

昭和三十年代、地元漁協に、なにがしかを納めて、小舟で、磯釣りを楽しむことが出来るようになった。

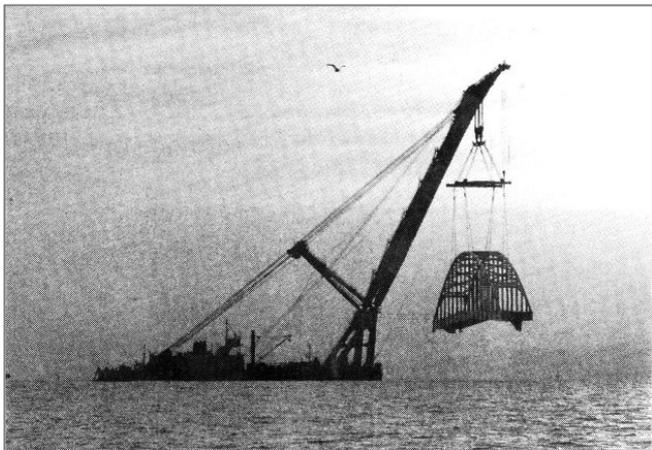
重症棟看護は職員に切り替り、福祉年金が支給されるようになり、希望者の労務外出がはじまって、軽快者は別れの棧橋から退所して行った。

逃走罪で入れられた監房も、新しい居住棟の整地で埋められ、小型船舶操縦士試験を受けて（42名）、時には海土六キロの日生港まで出かける者もあった。

この頃から、入所者の島への出入りは職員棧橋からで、回春棧橋はいつの間にか釣り船専用棧橋になってしまっていた。

各県の「里帰り」も始まって、故郷の山河は懐かしかったが、世代は交替し、今、浦島の感を深くしたものである。

昭和四十年代に入って、高校卒業生のための自動車教習が始まり、入所者はバスに乗っても乗者拒否をされなくなった。町の成人式に初めて参加をゆるされたのもこの頃であった。



山坂の多い島で、足の裏疵に苦労した者達は、どうしてもバイクに乗りたくなった。五十歳を超える者達の真剣な練習が始まった。

牛窓署へバイクの許可証を受けに出かけた。免許取得者は百三十余名。

そのころ、虫明・長島間の通船森丸が、ポンポン船からフェリーへ切り替った。

二輪に乗られるようになったら、四輪に乗りたくなって、自動車教習所へ通うもの達が増えた。フェリーでは、島の松の木を盗掘して運ぶトラックと乗り合わせることもあった。

島人の心からいつの間にか島にはり回らされた透明な壁は消え失せていた。が、葬いは島の友人多数の見送りは受けても、その中に、はらから一人を見つける事はなかった。

ここは、やはり「島」であった。

五十一年秋の台風禍以来、園の居住棟再建に山を削りとった土砂を運ぶ十トントラックが、砂埃を巻いて、島を東西につきつて走り回り、資材運搬のトラックは、フェリーに長い列を作った。

配食車、塵芥処理車にも馴れ、園内巡回バスは定期に島をめぐった。

いつからか、葬りの列に、故郷からの縁者が連なるようになった。表だたない数多くの人々に支えられて、昭和六十二年十月九日、橋が、橋桁が、入所者の目前に雄姿を現した。

ここは、今、ようやく「島」ではなくなった。

°+---°+---°+---°+---°+---°+---°+---°+---°+---°

※長島愛生園内の喫茶さざなみハウスでは、主に昭和40年代以降の愛生誌を自由に読むことができます。

